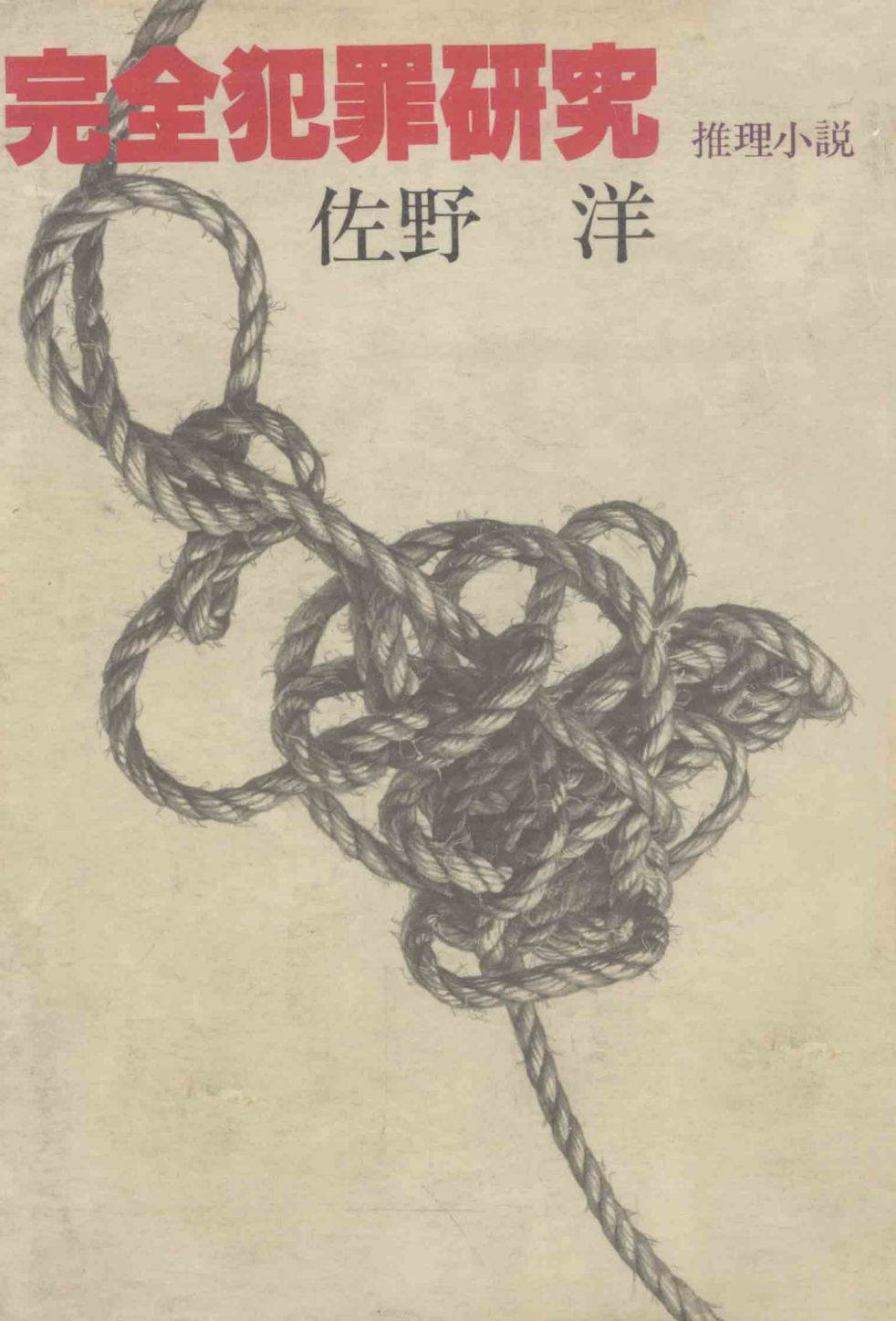
完全犯罪研究

推理小説

佐野　洋



完全犯罪研究

推理小説

佐野　洋

講談社

完全犯罪研究 ―推理小説―

定価 890円
第1刷 1978年3月24日
著者 佐野 洋
発行者 野間省一
発行所 株式会社講談社
〒112 東京都文京区音羽2―12―21
電話 東京(03)945―1111(大代表) 振替 東京8―3930
印刷所 豊国印刷株式会社
製本所 黒柳製本株式会社
© 1978 佐野 洋
落丁本・乱丁本はお取りかえいたします。 Printed in Japan

0093-305477-2253 (0) (文2)

完全犯罪研究 ―推理小説― 目次

死体移動 …… 7
偽装自殺 …… 51
証拠隠滅 …… 93
殺人契約 …… 135
完全相続 …… 177
心理殺人 …… 215

デザイン　村山豊夫

イラストレーション　細川弘司

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

完全犯罪研究

—推理小説—

死体移動

死体移動

「仮りに、あの電話が録音されていたら」

と、及川竜一郎は、のちに言っている。たしかに、それが録音され、しかもそのテープが保存されていたら、事件の説明は、変ったものになったであろう……。

『あの電話』とは、十月四日（月）の午後十時二十分ごろ、及川竜一郎の自宅に、稲村和彦からかかって来た電話である。

ただ、この電話のことは、しばらくの間、及川は誰にも話していなかった。それは、友人に対する信義だったかもしれないし、新聞記者の倫理でもあったのだろう。

いずれにせよ、そのような電話があった事実がわかったのは、かなりのちなのだから、この記録を、その電話から始めるのは正しくないようだ。

ここに一つの資料がある。雑誌『奔流』四月号に掲載された対談である。その一部を抄録すると――。

稲村　山と言えば、この間、ちょっと妙なことを考えましたよ。講演旅行に行った先なんですが、駅に着いてから講演までだいぶ時間があるというので、主催者側が、付近を自動車で案内してくれたんです。地方都市の場合、市内をちょっと走ると、すぐ山の中にはいる、というような例が多い

でしょう？

篠田　そう。しかも行政区画上は、そんな山も市になっていたりして……。

稲村　道路は舗装されているのだが、ほかの車とすれ違ったのは、二、三回でしたかね。それで、ふと思ったんですよ。この山の中に、死体がいくつも眠っているのではないか……。

篠田　死体が？　そこは戦国時代の古戦場か何かなの？

稲村　いや、そんな古い時代の死体ではなく、現代つまり自動車が日本人の足になりだしてからの死体ですよ。

篠田　交通事故ということ？

稲村　なるほど、あなたは善良だ（笑）。きっと、これまで、人を殺したいと思ったことなどないんでしょう（笑）。

篠田　ああ、殺人をして、死体を山の中に捨てるという意味ね。

稲村　そう。例えば、大久保某という人物がいましたね。若い女の子をドライブに誘っては、山の中に連れ込み、暴行した上で殺して、死体を埋めてしまう。ところが、その死体は、どうして発見されたか。すべて、彼の自供なんですよ。彼が逮捕されたあと、現場に連れて行かれ、この辺ですと言うので掘り返してみると、たしかにそこにあるという形で……。自然に、つまり、通行人とか犬とかが発見したわけではないんだ。そのことから類推すると、日本全国あっちこっちの山の中に、幾つもの死体が埋められていても不思議じゃない。

篠田　なるほど。ある杉林のうちに、一本だけ、葉の色が青々として、育ちもいい。刑事がそれを怪しんで、根元を掘ってみたら死体があった――そんな推理小説はどうです？（笑）。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

稲村　二人で書いてみませんか（笑）。しかし、小説はそれで通るかもしれないけれど、実際には、そんなに簡単には見つからないでしょう。仮りに、杉の木が一本だけ青々としていたからと言って、それに目をつける刑事がいるかどうか？　また、目をつけたとしてもですね。山林の所有者に話をつけなければならないし、人も動員しなければならない。確信もなしに、掘返しに着手できないでしょう。だから、完全犯罪なんて、案外に簡単なんじゃないか……。

篠田　しかし、さっき話が出た大久保某のように、行きずりの女の子を山に連れ込んで殺すというのは、いわゆる完全犯罪とは違う気がするんですよ。いや、どうも話が変な方向へ行ってしまったけれど（笑）。

稲村　構わないから続けましょう。完全犯罪というのは、人間にとっては、一つの夢なんだから、『旅と夢』という、この対談のテーマから逸脱はしていない（笑）。つまり、あなたは、計画犯罪でなければいけないというわけですか？

篠田　計画犯罪に限らないまでも、少なくとも、異常性格者の突発的な犯罪では困るという……。

稲村　わかりました。じゃあ、仮りに私が誰かを殺し、死体を山に埋めたという形で考えてみましょう。まあ、私にだって、殺したい人間が、一人や二人はいるのだから……（笑）。

篠田　その場合ね、あなたはどこで殺します？　現場に連れて行って殺し、その上で死体を埋めるとすれば簡単だけれど、まず現場に連れこむのがむずかしい。それから被害者が誰か友人に、そのことをしゃべっているかもしれないでしょう？「あしたの土曜日、稲村先生にドライブに連れて行ってもらう」とか……。いくら口止めしておいても、女性だと、つい親しい友人に自慢したりしたいものだから……。

稲村　ははあ、相手は女性なんですか。それは光栄だ（笑）。女性が相手だと、たしかにその危険はありますね。

篠田　だからと言って、都内のマンションで殺し、死体を運ぶというのも、途中がこわいですよ。

稲村　夜だったら？　たとえ一斉取締りがあっても、トランクまで開けろとは言わないでしょう？　殺してすぐなら、匂いだってしない。

篠田　信号で停っているところを、追突され、トランクが空いたら？　それから、たまたまその日、過激派が武器を運んでいるというような情報が警察にはいっていて、トランクの中まで調べられるとか……。

稲村　うん。完全犯罪と言うからには、そこまで考えなければいけないわけですな。

篠田　そう。警察の検問にひっかかっても、それをごまかすだけの対抗策ができているため、警官が挙手の礼をして見送ってくれるというような……。

稲村　それはいいな。「では、くれぐれも安全運転で……」なんて（笑）。

――月刊雑誌『奔流』は、雑誌の分類では総合雑誌とされている。しかし、難解な論文を中心とした堅い総合雑誌ではなく、政治からスポーツ、ときにはセックスまでを、それも内幕記事、ルポなどで扱うという形の雑誌である。

そして、この『旅と夢』と題された対談記事では出席者の名の脇に、カッコ入りで、肩書きがつけられているが、それによると、稲村和彦が（紫雲大教授・社会心理学）、篠田良介が（評論家）であった。

このうち、稲村和彦の肩書きが大学教授となっているのは、決して嘘ではないが、それだけでは、

必ずしも、彼の姿を正確に伝えることにはならないだろう。（篠田良介については、この記録ととくに関係がないと思われるので省略するが……）

大学教授と聞けば、だれでも、学者を想像する。稲村も学者であるには違いないが、ただ偉い学者というだけでは、『奔流』編集部も、彼を対談にひっぱり出したりはしなかったと思われる。

彼は……。いや、それは、のちに詳述するはずである。ここでは、『大学教授』だけが、彼の肩書きではない、という事実を指摘するにとどめよう。

長々と引用した対談の終り近くで、『警官が挙手の礼をして見送ってくれるというような』と、篠田良介が発言し、稲村がそれに相槌を打っている。

筆者は、これを面白いと思う。

この事件、つまり『マネキン人形パーティ事件』には、まさに、そのような場面があったのだから……。

ことによると、対談におけるその言葉が、大地にこぼれた種子のように、その後、発芽し、成長して、例の事件になったのかもしれないのだ。

二つ目の資料として、中央日報S県版の記事（十月七日付）を提示しよう。

S県版の左下隅に設けられた『一方通行』という欄である。

○……六日午後六時十分ごろ、国道２５４号線脇に白バイを停めて休んでいた県警交通機動隊T巡査（二四）は、あわてて、サングラスを目からはずした。

○……T巡査の目の前を通り過ぎて行った三台の乗用車に、それぞれ全裸の女性数人が乗っている

ように見えたのである。T巡査が、直ちにあとを追ったのは言うまでもない。
○……問題の東京ナンバーの車に追いついて、T巡査は二度びっくり。全裸の女性と思ったのは、実はマネキン人形で、運転していた学生の話では、軽井沢の別荘でやるパーティの飾りつけに使うのだという。
○……相手がマネキンでは、「わいせつ物陳列」にも「定員オーバー」にもならず、お引きとり願ったが、見送りながらT巡査思わず「かぜをひかないかなあ……」

この記事を書いたのは、中央日報S支局勤務の桜井浩二記者であった。
桜井は、大学を卒業すると同時に、この四月に中央日報社に入社、二週間の研修後、S支局に配属され、現在は、主として警察を担当している。
その桜井に本社から電話があったのは、十月七日午後一時半ごろであった。
ちょうど、彼が出前の天ぷらそばを食べ終ったとき、目の前の電話が鳴り、彼がそれに出ると、相手は女の声で、
「中央日報S県警クラブですね。そちらに、桜井さんいますか?」
と聞く。
「はい、ぼくがそうですが……」
「こちら本社の交換です。論説委員室の及川さんからです……」
「え? ぼくに?」
と、桜井はあわてて聞き返したが、そのときは、電話はつながっていた。

「もしもし……」
相手は低い殺したような声であった。
「はい、桜井ですが……」
彼は椅子に坐り直して答えた。論説委員は職制上の上司ではない。しかし、入社半年の新米記者にとっては、雲の上の存在と言ってよかった。
ことに、及川竜一郎は中央日報の論説委員であると同時に、社会評論家として、社外の雑誌や週刊誌にも執筆しており、桜井は入社以前から、彼の名を知っていた……。
「論説の及川と言います」
「はい、お名前はかねがね……」
「いや、そんなことはどうでもいいんだがね」
及川は、桜井が思わず口にした追従(ついしょう)に、不機嫌そうに答えた。送受器を握った桜井の左手に汗がにじんで来た。
「S県版に……」
と、及川は続けた。『一方通行』という欄があるね。支局に問い合わせたら、あれを書いたのは君だそうだから、電話したんだが……」
「はあ……。書いたのはぼくですが、デスクにだいぶ直されていまして……」
桜井は弁解口調で言った。実は、その記事の最後の部分を、彼は、
『見送りながらT巡査「見とれて、事故を起す車がなければいいが……」』
と書いたのだが、紙面には、「かぜをひかないかなあ……」になっていたのだ。

恐らく、支局のデスクは、『見送り』と『見とれて』では、『見る』が重複すると考えて直したのだろうが、桜井は、『かぜをひかないかなあ』では、少しふざけ過ぎているように思い、不満だった。

そんな不満があったから、及川の質問に、つい弁解口調が出てしまったのだろう。

「直されたと言っても、大筋は変っていないんだろう?」

「はい、その点は……」

「それで、運転していた学生の住所や名前はわかっているの?」

「いいえ……聞いておりません」

「聞いていないというのは、君が聞いていないということだろう? 白バイの警官にはわかっているのではないかな?」

「さあ……。その点は……」

「うん……」

及川は咳払いをした。「先輩として言わせてもらえば、たとえ記事には名前を出さない場合でも、そういう事実関係は、ちゃんと抑えておくことだな。後日、どんなことで役に立つかわからないんだ。できたら、今言ったことを調べてくれないか。つまり、その学生の住所、氏名、或いはどこの大学の学生かと言ったことだ……」

「わかりました。でも、その学生たち、何か変な点でも……」

「そういうわけではない。ただ、マネキン人形を使ったパーティというのが、どんなものか知りたいんだ」

「はい、早速調べてみます」

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com